

4. 里山資源を活かした山村の振興

里山資源を活かした生業の創出や交流人口の拡大により山村が活性化

② 現状と課題

里山資源であるきのこ類等の特用林産物は、本県の林業産出額の半数を占めている。

原木しいたけは、「のと115」の特秀品である「のとてまり」が市場で高い評価を得ているが、生産量が伸び悩んでいる。

生活様式の変化により薪炭林が利用されずに放置され、高齢化や大径木化が進んだことにより、木炭や原木しいたけ用の適寸の原木の確保が難しくなっている。

いしかわ里山振興ファンドを活用した、里山資源を活かした生業の創出やスローツーリズムの推進等による交流人口の拡大が進んでいる。

企業経営やライフスタイルの大きな転換の動きが見られる中、森林空間利用へのニーズが増加するとともに、山村への移住・定住の関心が高まっている。

今後は、移住者や地域の若者を、里山資源を活用した生業の担い手として確保・育成していくことが課題となっている。

① 特用林産物の生産動向

○ 特用林産物の産出額は、約13億5,000万円と平成22年以降、横ばいで推移している。

○ 原木しいたけの生産量は減少傾向にあるが、平成22年度から、奥能登地域でブランド化に取り組んでおり、令和2年度の初競りでは、「のと115」の特秀品「のとてまり」が1箱（8玉入り）26万円で落札されるなど、市場からは高評価を得ている。

○ 令和元年には、「のと115」の乾しいたけが、大嘗祭（だいじょうさい）の庭積机代物（にわづみのつくえしろもの）として供えられるなど、評価されている。

○ 奥能登地域で原木しいたけの生産者数が増加傾向にあり、「のと115」の生産量も2.8t（H23）から17.3t（R1）に増加した。一方、「のとてまり」の生産量は、生産管理の難しさから0.19t（H23）から0.28t（R1）と伸び悩んでいる。

○ 栽培きのこ類は、生産者数の減少により、菌床しいたけやえのきたけ、ひらたけの産出額が減少する一方、なめこやまいたけは産出額を維持または増加させている。ぶなしめじは、平成26年から能登地域で生産工場が稼働したことにより産出額ではしいたけを上回っている。

○ 木炭は、茶道が盛んな金沢で茶炭の需要が高いものの、専門の生産者は1名であり、兼業の生産者の多くが高齢となっており、生産拡大には担い手の確保が課題となっている。

○ 漆は、H27年度に文化庁が、国宝、重要文化財の修復に原則として、国産漆を使用する方針を発表した。本県の生産量は年間10kg程度であるが、将来の生産拡大に向け、県内4団体が植林等を行っている。



■ 特用林産物の産出額の推移(石川県) (千円)

項目	H22	R1	R1/H22
生しいたけ	900,065	437,417	49%
乾しいたけ	67,433	30,694	46%
なめこ	69,600	82,139	118%
まいたけ	15,059	69,204	460%
ぶなじめじ	0	664,692	皆増
その他栽培きのこ	41,183	30,158	73%
まつたけ	236,022	22,227	9%
わさび	1,885	5,255	279%
うるし	-	336	H22統計なし
竹材	5,250	1,830	35%
木炭	11,194	9,681	86%
特用林産物算出額	1,347,691	1,353,632	100%

出典：特用林産需給動向

■ 特色ある特用林産物



原木しいたけ「のと115」



茶道用木炭



漆器



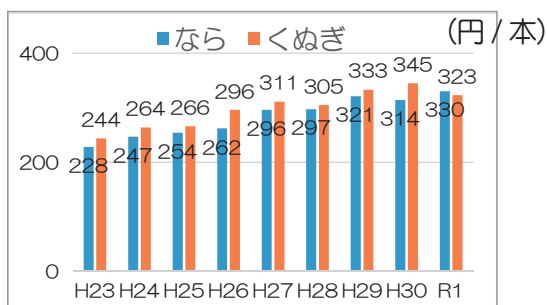
乾しいたけ

② きのこや木炭用原木林の状況

○ しいたけ用原木（ほだ木）の需要が増加する一方、薪炭林が放置され高齢化や大径木化が進んだことから、適寸の原木を生産できる林が少ない。全国的にしいたけ用原木価格が上昇しており、伐採を請け負う作業員の減少なども相まって調達が困難になりつつある。

○ 近年の広葉樹林の年間伐採面積は 100ha 前後であるが、高齢化や大径化が進んだ伐採木の大半がチップ用に供給されている。

■ しいたけ用原木（ほだ木）価格の推移（全国）



出典：林野庁「令和元年特用林産基礎資料」

■ 原木（ほだ木）の伐採





③ 里山資源を活用した生業の創出や交流人口の拡大

- 県は金融機関と「いしかわ里山振興ファンド」⁶²を創設し、里山資源を活用した生業の創出や交流人口の拡大につながる取り組みをこれまでに約220件支援した結果、地域の資源を活かした商品の開発や農家民宿の増加が進み、山村の魅力の創出や交流人口の拡大につながっている。このような中、里山地域では高齢化や人口減少が進み、生業の担い手の確保・育成が課題となっている。

④ 森林空間の利用状況

- 森林空間は森林環境教育の場、アウトドアスポーツなどレクリエーションの場、森林浴等の保健・休養の場として利用されている。石川県森林公園（津幡町）は、平成25年に森林セラピー基地に認定され、森林セラピスト⁶³の養成や森林セラピー体験プログラムの提供を行っている。
- 近年、企業経営や生き方の価値観、ライフスタイルの大きな転換の動きが見られる中、森林空間の活用に対するニーズが多様化している。

⑤ 移住・定住等への関心の高まり

- 平成23年の「能登の里山里海」の世界農業遺産認定や、平成27年の北陸新幹線金沢開業等により県外から能登への移住者が増加しており、新型コロナウイルス感染症を契機に都市部から地方への移住・定住等への関心も更に高まっている。

⁶² 平成27年度までの名称は「いしかわ里山創成ファンド」という。

⁶³ 森林を訪れる利用者に応じて適切なプログラムを提供し、効果的なセラピー活動を指導する者。



② 推進する施策

「のとてまり」ブランドをけん引役とした原木しいたけ、菌床きのこ、漆、茶炭等の特用林産物の生産拡大に向け、施設整備を進めるとともに、生産技術研修の充実等により担い手の確保・育成に取り組む。

里山の広葉樹林は、漆、茶炭、しいたけ原木用林として循環利用を進める。

いしかわり山振興ファンド等を活用し、多様な里山資源を活かした生業の創出や交流人口の拡大を更に進めるとともに、移住者や地域の若者を取り込み、担い手の確保・育成を進める。

森林空間を利用した新たなビジネスの創出を通じて山村の活性化を進める。

① 「のとてまり」ブランドをけん引役とした原木しいたけの生産量の拡大

○ ビニールハウスや散水機等の施設整備を進めるとともに、生産者の高齢化が進んでいることを踏まえ、作業の機械化等による労働負荷の軽減を図るとともに、いしかわ耕稼塾での技術研修の充実等により、新規の生産者が参入しやすい体制づくりを進める。

○ 「のとてまり」の生産拡大に向け、優良生産者の気温、湿度等に応じた生産管理方法のマニュアル化や生産者間での情報共有等に取り組む。

② 栽培きのこや漆、茶炭等の生産振興

○ 栽培きのこの生産施設の整備を進めるとともに、GAP⁶⁴ 認証の取得等を通じた安心安全の確保を図る。また、菌床栽培にあたっては県産材由来のおが粉を積極的に使用する。

○ 伝統産業を支える漆、茶炭等においても、施設整備等を進めるとともに、イベントやメディアを通じた魅力の発信や、研修会などの開催による担い手の確保、生産技術の向上に努める。

③ 里山の広葉樹の循環利用による漆、茶炭、しいたけ原木用の広葉樹林の造成等

○ 高齢化・大径木化が進む広葉樹林は、伐採、植栽等による森林の若返りを図り、木炭、薪、しいたけ原木用林として循環利用を進める。

○ 生産量の少ない漆、茶炭の生産拡大に向け、県緑化センター等の県有地の活用も図りながら、企業やボランティア団体などとも連携し、ウルシや茶炭の原木となるクヌギなどの広葉樹林の造成を進める。

⁶⁴ 「Good Agricultural Practice（農業生産工程管理）」の略。農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組。第三者機関の審査による認証制度がある。

4 里山資源を活かした生業の創出や交流人口の拡大

- いしかわ里山振興ファンド等を活用し、木材や特用林産物、クロモジなど林床植物等の多様な里山資源を活かした生業の創出を進めるとともに、移住者や地域の若者による生業の担い手の参入を進める。
- 農村ボランティア・森づくりボランティアなどによる都市住民の里山地域での活動や、森林セラピー等の森林空間を活用した新たなビジネスの創出を通じて、森林や地域に継続的にかかわる交流（関係）人口を増やし、里山林の循環利用や森林空間の活用による山村の活性化を進める。

■いしかわ里山振興ファンドを活用したお茶炭のブランド化



■森林空間を活用した新産業(森林サービス産業)のイメージ

学び	遊び・スポーツ	健康・癒やし	新たなニーズ
<p>青少年等が森林・林業について体験・学習する場や、木の良さやその利用の意義を学ぶ活動である「木育」の場として利用。</p> <p>【事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 森林環境教育 ➢ セカンドスクール ➢ 森のようちえん ➢ 林間学校 等 	<p>景観や環境に優れた森林をフィールドとして、例えば、自然探勝、トレッキング、アウトドアスポーツの場として利用。</p> <p>【事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ フォレスト・アドベンチャー ➢ ロングトレイル ➢ マウンテンバイク 等 	<p>森林の中でのリラクゼーション・プログラム等を通じて、森を楽しみながら、心と身体のリフレッシュや健康維持・増進、病気の予防を図ることを目的としたプログラムの場として利用。</p> <p>【事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 森林浴 ➢ 森林セラピー ➢ クアオルトウォーキング 等 	<p>国民の価値観が多様化する中で、都市住民を中心に「ゆとり」や「やすらぎ」を求める傾向が強まっており、健康志向、環境意識の高まりと相まって、Uターン・Iターン、定住希望者が増加するなど、新しいライフスタイルを実現する場として利用。</p> <p>【事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ サテライトオフィス ➢ テレワーク 等 

出典：林野庁「森林サービス産業フォーラム基調報告資料」

指標	特用林産物産出額	13.5 億円/年 → 16.4 億円/年
	のとてまり生産量	0.3t /年 → 1.5t /年



コラム

奥能登の原木しいたけ「のとてまり」

原木しいたけ「のとてまり」(平成23年9月商標登録)は、奥能登地域で栽培される原木しいたけ「のと115」の特秀品で、香りや風味がよく、肉厚で歯切れのよい食感から「山のアワビ」と呼ばれている。大きく、形のよい「のとてまり」は市場の評価も高く、出荷10年目を迎えた令和2年の初せりでは過去最高額の1箱26万円で落札されるなど、石川の冬を代表するブランド食材として親しまれている。



原木しいたけ「のと115」の特秀品である「のとてまり」

〇ブランド化の取組み

奥能登のしいたけ生産者や、JA、行政などで作る奥能登原木しいたけ活性化協議会(以下、協議会)では、原木しいたけの産地活性化を目指し、「のとてまり」をけん引役としたブランド化や消費拡大に取り組んできた。

毎年12月から3月の出荷シーズンには、県内の飲食店等で「のとてまり」・「のと115」を使った季節限定メニューを提供するイベントや、首都圏の百貨店や有名レストランを会場としたPRのほか、家庭でも原木しいたけの風味や味わいが楽しめるレシピの開発など、魅力発信に取り組んでいる。



イベントで提供された創作料理

〇生産拡大、技術向上の取組み

協議会では、「のとてまり」のブランドイメージにふさわしい品質を保つため、厳しい出荷基準(※)を定めているほか、関係者が連携し、生産量の拡大に向けて栽培技術の向上や原木の確保にも取り組んでいる。また、県の農林総合研究センター(林業試験場)では、「のとてまり」の発生数を増やすため、散水方法の改良や生育条件(温度や水分等)の解明など、栽培技術の確立に向けた試験研究を重ね、奥能登農林総合事務所と連携し、講習会や生産者の巡回指導を通じた普及に取り組んでいる。



ICT機器を導入したハウス

今後は、ICTを活用した効率的な普及指導を行い、関係者一体となって、原木しいたけの生産振興に取り組むこととしている。

※かさの直径8cm以上、肉厚3cm以上、巻き込み1cm以上